

氏名	RAMIREZ BUITRAGO Camilo Andres (ラミレス カミーロ)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第85号		
学位授与日	令和3年3月15日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	エスノグラフィック・イラストレーション ボゴタと東京の日常生活の比較研究		
審査委員	主査	准教授	中村 寛
	副査	教授	久保田 晃弘
	副査	漫画家・イラストレーター	天野 誠
	指導教員	教授	秋山 孝

内容の要旨

本研究は2014年に日本の文化と初めて直接出会った時から現在に至るまで、私自身が経験したり考えたりした様々なことがきっかけとなってスタートした。私はまず日本語を学習し始め、同時に日本の文化と自国であるコロンビアの文化を比較して考えるプロセスを開始し始めた。まず私が驚いたのは、日本の独特かつ多様な文化、価値観だった。さらにその文化について学んでいくうちに、同時に私は自国の文化、価値観、歴史などについても改めて考えるようになった。その結果私は「私自身のコロンビア文化についての知識が実はとても少ない」ということに気がついた。また私は実際にこの6年間、様々な日本人たちと交流してきた。例えば私が通っている大学の先生たちやクラスメート、また私が働いている英会話学校の生徒たちなどである。彼らと話しながら、私は日本人とコロンビア人が互いの国について持っている知識がとても少ないということにも気がついた。つまり、日本とコロンビアの間に相互の知識が足りないという現状を強く認識した。それを解決する一つの方法として「イラストレーションというメディアを通して日本とコロンビアの間の知識の相互格差を埋める」という、本研究の基本となる目的が設定された。この目的を達成するために本研究を大きく二つのパートに分けた。まず前半部分は、歴史的な側面から行った研究である。ここで私が行おうとしたのは、コロンビアという国家が体験してきた歴史的な出来事を通して、コロンビアという国をより深く理解することである。さらにそのコロンビアを形成してきた様々な出来事が絵画やイラストレーションなどの視覚表現にどの様に反映されてきたのかを、詳細に確認していく。この第一部は、論文では第2章、第3章から構成される。次に後半の第二部では、コロンビア人である私が日本で生活することで得てきた具体的な経験を基に研究を行う。コロンビア人イラストレーターという視点から、日本という国、その文化と言語をどの様に観察してきたのか、またそれを自分の作品にどのように反映してきたのかということ、この第二部で明らかにする。この第二部は、論文では第4章と第5章から構成されている部分である。最終的に創作研究としては、第一部と第二部、つまり歴史的な側面と経験的な側面から導き出した結論を基にして、日本文化とコロンビア文化の間のお互いの知識的な格差を埋める作品を制作していく。

Japan and Colombia, 2 countries separated by a huge geographical, cultural, and knowledge gap. When you ask people from both countries: “What do you know about Colombia/Japan?” the answers reflect a lack of mutual knowledge between both. I am a Colombian illustrator and have lived in Tokyo Japan for the last six years. This experience offered me the perfect opportunity to understand in deep, Japanese culture and subsequently transmit all these experiences to Colombian people. At the same time, it allowed me to share and show my Colombian culture to Japanese people.

The purpose of this thesis is to help close a little bit more this cultural gap. How? By developing a method of cultural exchange study between Colombia and Japan through a combination of disciplines such as history, ethnography, art, illustration, and my personal experience living in Japan. The final objective is to improve the mutual understanding of both cultures by the production of picture books, which will reflect the different aspects studied throughout this thesis.

To achieve this final objective, this thesis will be divided into 3 parts: History, Art-ethnography, and real experience in Japan. In the first part: History; a historical overview of the most important events that shaped both countries will be done. The objective of this initial part is to use the scope of history to draw a set of characteristics that will try to define the identity of both countries at this moment in time. The Second Part will be dedicated to studying the role of art and illustration in the ethnographic process of studying a society. Lastly, the third part will be dedicated to talking about the experience of living in Japan as a Colombian illustrator, and how Illustration media can be used as a way to observe Japanese culture and daily life in the city of Tokyo.

The objective of this third part is to observe, document, and record the concrete experience of living in Tokyo and how these observations and experiences become reference material to create illustrations. As a result, a set of picture books gathering the observations and experiences lived in Japan and Colombia will be produced.

The first part covers Chapters 1, 2, and 3. And will talk about the defining historical moments that shaped the current state of Colombia and Japan. This part will be divided into Colombian history and Japanese history. In the case of Colombian history, the historic review will take a look at the Spanish conquest and colonial periods, which shaped and set the roots of the nowadays Colombian society. In the case of Japan, the historical review will start from the diplomatic and economic opening of the z in 1853, passing through the Meiji revolution, the subsequent invasion of the US after World War 2, the rapid economic and industrial growth of the post-war era, the burst of the economic bubble in the 90s and the era of “stagnation” that came right after. This part will allow us to have a better understanding of what is the current “personality” or main characteristics of each country based on their history. As conclusions, regarding Colombia: A huge social gap between rich and poor, strong catholic religious beliefs, and multiculturalism are the main characteristics. On the other hand, in the case of Japan: Monoculture, fixation for the rules and systems, and a strong attachment to traditional institutions are the main characteristics of this country.

As this is a cultural research, the second part will be dedicated to exploring the discipline of ethnography and its relationship with Art. In other words how Art has been used to observe the different human groups, cultures, and behaviors. In this part, the relationship between art and ethnography will be shown by giving examples of artists whose works reflect their experiences observing Japanese culture. Special interest will be put in the Japanese architect and artist Kon Wajiro, who established the “Modernology” field of sociology. Modernology studies the changes in Tokyo urban city life throughout drawing and sketches. His method of research using art as a way to observe and record the reality of a social group will be used as a tool to produce the final artwork and illustrations of this research.

The third and last part of this research will talk about my experience living in Japan. How this experience has shaped my artwork during these years, and how I have observed Japan throughout my illustrations. In this part, the interest in Japanese culture is taken as a 3 stages process. The initial state is a Japanese language interest. The next stage is showing the Colombian culture to Japan through my artwork, and the last stage is showing both Colombian and Japanese culture simultaneously through illustration.

審査結果の要旨

ラミレス・カミロ氏の博士論文「Ethnographic Illustration: Comparative Study of Everyday Life in Bogota and Tokyo (エスノグラフィック・イラストレーション ボゴタと東京の日常生活の比較研究)」は、制作を基盤とする論文 (practice-based thesis) である。入学以来、ラミレス氏が取り組んできた研究は、出身国コロンビアと日本、とりわけボゴタと東京の生活風景の比較研究であった。このテーマは、彼自身がボゴタから東京にやってきて暮らすなかで経験した数々の「文化ショック culture shock」がきっかけとなっている。

自らが身を置く新しい環境を詳細に観察し描くという行為は、フィールドワークに基づくエスノグラフィ (民族誌) の営みに近い。ラミレス氏は、このことに気づき、「エスノグラフィック・イラストレーション (Ethnographic Illustration)」という概念を打ち立てる。そのようにして、すでに無意識におこなっていた観察を、批判的に吟味し、フィールドワークを自覚的におこなうようになった。その過程で、自文化の歴史をも学びなおし、比較の方法自体を相対化していく。

序論となる第1章では、本研究のきっかけとなった、ラミレス氏自身の経験や、彼が日本に来たばかりの頃におこなったアンケート調査の結果が述べられ、そのうえで全体が二部構成に分割されている。第一部 (2、3章) は、コロンビアと日本の文化比較をする際に不可欠に思われる歴史的な事象をいくつかとりあげ、その文脈を提示している。それを受けて、第二部 (4、5、6章) では、自身の経験とそれに基づく自作品が扱われる。また、自作品を展開するうえで有意義と思われる参照軸として、幾人かの先行する作家が扱われている。

第2章では、現在のコロンビアのアイデンティティや価値意識を語るうえで欠かすことができない歴史的背景としてヨーロッパによる侵略と植民地化の経験が論じられる。これは、コロンビアだけでなく、ラテン・アメリカ社会を語るうえで欠かせない要素のひとつと言えるだろう。どのようにして個人主義が浸透し、社会階層化が進み、分断や紛争がもたらされたかの背景には、被征服の経験がある。第3章では、今日の東京の生活様式との関係で、日本の近現代史のうち重要な契機がいくつか論じられる。とくに、明治維新、第二次大戦後の占領期、バブ

ル期の3つのモーメントに焦点を当てられている。

第4章は、日本を描いたエスノグラフィック・イラストレーションの先行例として、ロバート・フレデリック・ブルーム、ラズ・マーティンソン、今和次郎、グレイソン・ペリーの四人が論じられている。そのうえで、自作品の検討をおこなっている。第5章では、前章の流れを踏まえ、イラストレーションと合わせて、日常の観察のスケッチの検討もおこなっている。4章で紹介される自作品がカバーする領域を超えて、選挙キャンペーンや、宗教、建設業労働者、ヤンキー、スポーツ・ファンなど、生活のさまざまな局面に眼を向け、それをイラストレーションやスケッチにおさめているのが印象的である。

口頭試問においては、いくつかの疑問や批判も提出された。第一の批判は、歴史叙述に関するもので、コロンビアと日本のアイデンティティの現在を理解するための記述として、これだけではあまりに大雑把すぎ、不十分なうえ、取り上げている要素が恣意的に過ぎないかという批判だった。むしろ、歴史記述はなくてもよかったという意見もあった。だが、この歴史叙述は、歴史を描くことを目的とするというよりは、自身の観察やそれに基づいて展開するイラストレーションを、固有の文脈のなかで理解するためのもので、素朴な「カルチャー・ショック」を感じる自身の感性がどこからくるのかを深く理解するためには、それまで自分でも気づいていなかった歴史的背景を調べる必要があったと言えよう。

第二の批判は、文化の表象をめぐるものである。エスノグラフィや比較研究における表象のあり方については、これまでも人文・社会科学のなかだけでも多くの批判が提出されてきた。比較という名のもとで、差異を強調し、それを固定化して理解することで、他者をステレオタイプのうちに本質化してしまう危険性は、いわゆるポストコロニアル批評のなかで議論されてきた。だが、描く側と描かれる側のあいだに横たわる圧倒的な権力の不均衡を前提に提出されるこの種の表象の暴力と、ラミレス氏の表現にあらわれるステレオタイプの問題は、同一とは言えないだろう。

もちろんそれでも、差異を強調することでステレオタイプを補強してしまうという問題は残る。たとえば、大人しく従順に通勤列車に乗る東京の日本人と、騒ぎながら混沌のなかにいるボゴタのコロンビア人を描くことは、日本人／コロンビア人の差異とアイデンティティを本質化してしまうことになるだろう。だが、ラミレス氏の作品の魅力は、両者の差異だけでなく、共通性にも目を向けていることだった。そして、観察された差異とアイデンティティを、日本やコロンビア社会全体に拡張して一般化しようとはせず、むしろそれをユーモラスに描こうとしている点にこそ、ラミレス氏のプロジェクトの強みがあると言える。

以上を踏まえ、作品、論文、口頭試問のすべてを、実技主査、論文主査、論文副査、外部審査員の4名のあいだで総合評価した結果、ラミレス・カミロ氏は学位取得にふさわしいと認めた。ラミレス氏が、論文と制作とを有機的に交錯させることで、相互に質を高めることができた点も高く評価された。とりわけ、作品への評価はきわめて高く、今後はさらなる展開と活躍が期待される。

(中村 寛)